
無限のそら

猫小判

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無限のそら

【Nコード】

N2121B

【作者名】

猫小判

【あらすじ】

二十七世紀、人類は光速に限りなく近い速度（光速の99.99%）で宇宙空間を航行する術を手に入れた。同時に、他の恒星系に地球のような青い惑星を発見する。人類は太陽系の限界と持ち前の好奇心に突き動かされて、地球を捨てて他の恒星系へと旅立つて行ったのだった……。それから地球時間にして二千年が経ち、多数の惑星に人の暮らしが定着した頃に、使用人の少年と海賊の少女は出会っー。絶対時間の概念を捨て去り、相対時間の概念を取り入れた、出会いと別れの物語。

第一話 奴隸の少年と海賊少女（前書き）

第一話と言いますが、相対時間についての説明も宇宙旅行もありません。プロローグみたいなものです。

第一話 奴隷の少年と海賊少女

「リック、早く食器を洗いなさい！ 次は掃除をしなければならぬのだからね！」

「はい……、奥様」

煌びやかな装飾に彩られた、まるで中世ヨーロッパの貴族の屋敷のような家、その厨房で精一杯の速さで食器を洗う少年、リックにこの家の奥方である中年女性の叱責が降り注ぐ。明らかに不可能といえる要求に、リックは愛想笑いで返すことしかできない。

リックと呼ばれた少年は背が低く痩せ型、黒い瞳はいつも不安そうに揺れ、栄養が足りていないような色素が薄い長髪を後ろでひとつにまとめている。身にまとっている服はつぎはぎだらけのよれよれで、靴は原型が残っていないほどに穴だらけだ。リックはこの星で最下層の身分である奉公人であった。それは中世で言う奴隷とそんなに変わらない。

リックは食器を洗い終え、女性の前に跪く。女性は見るのも汚らわしいといった様子で目を逸らしながら次の仕事内容を告げた。

「次はこの屋敷全ての場所の掃除よ。それで今日のおまへの仕事は終わり」

「はい、奥様」

リックは床に額がつきそうなほどに頭を下げてからたちあがり、掃除に取り掛かった。城のように広い屋敷を一人で黙々と掃除する。床をほうきで掃き、水掻きする。置物や壁は乾いた布で丹念に磨いていった。リックは手を抜くということを知らない少年であった。

リックがようやく掃除を終えるころには屋敷の人間はとつくに夢

の世界に旅立った後だったが、リックはそれでも無言で頭を下げ、家路に着いた。

リックの家はスラムの中でも一番治安の悪いところにある。麻薬が半ば合法化され、道の端には中毒者が転がっているのが普通の、異常な世界だった。

今日も道端には浮浪者となり果てたぼろぼろの女が転がっていたが、リックは無視して真っ直ぐ進む。いつもの光景だからだ。路地裏に入り、角を曲がり、五階建ての今にも崩れそうなぼろぼろのビルに入っていく。階段を上り五階の一番端の部屋の扉を開けた。そこがリックの家だ。

小奇麗に片付けられていて窓際にベッドがひとつあるだけある、狭い簡素な部屋だった。リックはそのベッドの中に飛び込んで深くため息をついた。

「今日も疲れたなあ……」

リックは窓から二つ寄り添うようにして浮かんでいる月を見上げ、それをつかもうとするかのように右腕を伸ばす。

「僕もあの広い宇宙の向こうに旅立って、そして地球に行ってみたいよ……」

今はもういない両親からいつも聞いていた人類の故郷、そして望むものが全て手に入るといわれている理想郷、地球。それはもう夢物語に近い話。それでもリックはその夢物語を信じていた。それでもリックはその夢物語を信じていた。

「どんな人でもいい、僕を宇宙船に乗せてくれないかな……」
リックは切に願う。しかし、それはありえない話だ。雑用以外に何の技能も持たない自分を乗せてくれる宇宙船なんて無いことをリックは知っている。それでもリックは、明日目が覚めたら宇宙をまたにかける海賊船がこの島に訪れていることを願いながら眠りにつくのだった。

翌日、リックはいつものように目を覚ました。しかし、夜明けの筈のその時間の窓の外は薄闇に包まれていた。

「何か、あったのかな……？」

リックは寝ぼけ眼で窓の外空を見上げ、大きく目を見開く。そこには、木で組まれたようなデザインの大航海時代の船が優雅に空を滑るように飛んでいた。今の時代としては多少いかれたデザインだが、船底に付けられている垂直推進装置を見れば一目で何なのかわかる。

「宇宙船……！」

リックの胸は高鳴る。この星に訪れる船というのは大体旅客船ばかりでリックのような奉公人が乗る方法はない。しかし、今回現れたのは宇宙をまたにかけける海賊船だろう。それならばクルーになれる可能性もある。

リックは部屋を飛び出し、階段を駆け下り、船を追いかけて駆け出していく。自分の未来を切り開くために……。

「ああ、おいしいご飯が食べたい……」

髪と同じ真っ赤なロングコートを身にまとい腰にはなぜか湾刀をぶら下げている。この一見海賊にしか見えない少女、レナはこの船、ジュリエッタ号の船長である。

レナはさつと立ち上がり、癪癪でも起こしたかのように叫んだ。

「ロベルト！早く船を降ろしてシェフを攫ってきなさい！」

「レナ様、このような街中で船を降ろすことはできませんよ」

レナより一段低いところに座っているロベルトと呼ばれた老人は、柔らかな物腰でレナをなだめる。ロベルトのもつともな言葉にレナは言葉を返せず、どっかりと椅子に腰を下ろした。

「もお！　なんでフェイ姉さん、やめちゃったのよお……！」

事は二週間前。そのときに立ち寄っていた星で、それまでシエフを勤めていた女性、フェイが身ごもっていることを理由に船を下りると言い出した。

フェイはレナの姉のような存在だったが、レナは素直に彼女を祝福し、あまり世話になっっているのも迷惑だといって何も考えずに星を出発した。

しかし、それが間違いだった。ジュリエッタ号には料理のできる人間がフェイしかいなかったのだ。一度あの星に戻ることも考えたが、あれだけ格好よく星を後にしたのに、のこのこと戻るのも格好が付かない。結局、そのまま次の星を目指すことに。それから二週間、彼女らは旧時代の宇宙食のような食事しかとっていないのだった。

しばらくたって、ようやく船が着陸できるようなスペースのある場所にたどり着いた。

「レナ様、ようやく地上に降りられますぞ」

「ホント!? よぉーし、腕のいいコックを見つけろー!!」

レナはブリッジを飛び出し、乗降口のほうへ駆けていった。その様子にロベルトや他の乗組員たちは小さくため息をつくのだった。

船は街の郊外に着陸しようとしている。リックは心臓をバクバク鳴らしながらも辛うじて船に追いついていた。

「よ、よかった……。追いつけた……」

ひざに両手をついて息を何とか整えようとするが、暴れだした呼吸は中々治まらない。そうこうしているうちに船は地面にゆっくりと着陸した。

（どんな人が乗っているんだろう……）

早鐘を打つ心臓はすでに酸素を求めているものではなくなっていた。

重々しい音とともに甲板の前方が持ち上がり、そこから人影が宙に舞う。

「あ、あぶない!!」

その高さはゆうに十メートルはある。リックは叫び、思わず目を両手で覆った。だが、リックの予想に反して、彼の耳に入った音は軽に着地音。恐る恐る目を開けると、そこには真っ紅な少女が凜と佇んでいた。

「あ、あの……？」

紅い少女はきよるきよると辺りを見回して、やがてリックの方に視線が行き着くと、眉を吊り上げまくし立てた。

「君ね？ さつき叫んだの！？ 危うく頭から落ちそうになったじゃない！！ 頭から落ちて馬鹿になったら、どうやって責任とってくれるの！？」

「え……、いや。ご、ごめんなさい……」

リックは素直に頭を下げた。頭から落ちたら馬鹿になる程度では済まない気もするが、少女の剣幕に押されているリックが気付くはずもない。

「そういうことじゃなくてねえ……」

素直に頭を下げるリックに少女は氣勢を削がれて疲れたようにため息をついた。リックは頭を上げて、首をかしげた。

「どうしてそんな疲れた顔しているんですか？」

「君のせいよ、君の」

少女は再度ため息をつき、何かを思いついたように手をぱんと打った。

「そうだ！ 君にお願いしたいことがあるんだけど……。まずは自己紹介。あたしはレナって言うの。君は？」

「僕はリックといいます。お願いしたいことって何ですか？」

「あたしがお願いしたいことって言うのは……」

「レナ様、お待ちください」

「ロベルト……。話の腰、折らないでよね……」

レナの言葉をさえぎったのは、甲板からロープで降りてくるロベルトと呼ばれた老人だった。ロベルトは地面に降り立ちリックとレナの傍まで歩み寄り、リックに視線を向ける。

「レナ様、こちらは？」

「ああ、彼はリック。この星の子みたいね」

紹介されたリックはロベルトを見て何を思ったのか、いきなり跪き、地面に額をこすりつけるような平伏した。

「お願いです。僕を貴方の船に乗せてください！料理番でも、掃除担当でも、雑用でも何でもいいんです。お願いしますー！」

いきなりのにレナとロベルトは面を食らったように動けない。リックは不安そうな瞳でロベルトを見上げた。

「駄目、でしょうか……」

「そう聞かれましたも……。船長は私ではなく……」

ロベルトは困ったような表情でレナのほうに視線を向ける。レナは機嫌を損ねたのか頬を思い切り膨らましていた。リックは目を見開く。

「貴女が船長だったんですか！？」

「悪かったわね、船長に見えなくて」

レナはますます機嫌を損ねて、そっぽを向く。リックは恐る恐る尋ねた。

「駄目、でしょうか……？」

「駄目」

一言で斬って捨てられたリックは、がっくりと肩を落とした。見かねたロベルトはリックに助け舟を出す。

「レナ様、彼は料理もできるようですし……」

「そういうことじゃないわ。リックは船にのるには子供過ぎるのよ」

「貴女様はそれこそ物心つく前から乗っておられましたのに……」

「だまりなさい」

一連のやり取りをレナとロベルトの表情を交互に伺いながら見守っていたリックは、おずおずと声を上げた。

「子供って……僕はレナさん、船長と同じ年だと思っんですが……」

「はあ！？ 何言ってるの！？ あたしは１７歳。もう大人よ！！」

「僕も１７歳なんですが……」

「うそ!？」

これにはレナだけでなくロベルトも驚いていた。

リックはレナよりも頭半分ほど背が低い。レナが大きいわけではなく、リックが小さすぎるからだ。

レナはそれでも首を横に振った。

「駄目なものは駄目よ」

「そんな……」

リックはがくりとうなだれた。その姿は今にも崩れさってしまうかのよう。ロベルトはひとつ溜め息をついて、肩をすくめた。

「何をそんなに意固地になっているのかは知りませんが……」

ロベルトはそこで言葉を切って、名案を思いついたかのような笑顔を浮かべた。

「そうだ、リック君の料理の腕前で船に乗せるかどうか決めてはどうでしょうか?」

「いいんですか!？」

リックは渡りに船とばかりに目を輝かせる。レナは苦虫でも噛みつぶしたような顔をして、渋々肯いた。

「……しょうがないわね。ロベルトに免じてテストは受けさせてあげるわ。ただし、あたしを満足させる料理じゃないと合格は出せないわよ!」

「はい! 頑張ります!」

リックは輝くような笑顔を浮かべて肯く。レナは何となくリックの笑顔が眩しく見えて、リックから背を向けたのだった。

第一話 奴隸の少年と海賊少女（後書き）

読んで頂いてありがとうございました。いきなりですみませんが、試行錯誤しながら文章を書いているので投稿間隔は長いものになるかもしれません。最低、二週間に一回は更新するつもりですが、確約は出来ないのどうかご容赦を……。

第二話 ジュリエッタ号

ジュリエッタ号の中をリックはレナにつれられて進んでいく。船内は外観に違わず、所々に見え隠れするパイプや計器類以外は全て木製のものであった。リックは物珍しそうにあたりをきよきよと視線を彷徨わせながら歩いていく。

不意にレナはある扉の前で立ち止まった。その扉は今まで通り過ぎてきた装飾された扉と違い、装飾などどこにも見当たらず、のっぺりとした木の面にドアノブが申し訳程度に光を反射し、存在を主張しているだけだ。レナはノブに手を掛け一気に押し開いた。

「ここが厨房よ。食材も一式そろっているから」

「うわぁ……」

そこは床もテーブルも壁も、部屋中が木で囲まれていて、オープンやコンロも中身は最新の機械なのだろうがその外観はレンガでできている。その部屋は、おとぎ話の中の世界に出てきそうで、太古の昔に海をまたにかけた船のようなデザインのこの宇宙船の中でも一際温かみを持っていた。

レナは目を輝かせているリックを見て一つため息をこぼし、踵を返す。

「このものを使って私を含めた五人の審査員を満足させられたら、君をクルーとして認めてあげるわ。じゃ、五人分の料理ができたら隣の食堂よろしくね」

「はい！」

リックは返事を返しながら巨大な冷凍庫の中を覗き込み、また感嘆のため息をついた。そこにはリックが見たこともない多種多様な食材がずらりと並んでいた。

「これなら、すごいお料理ができそう……」

リックは一度冷蔵庫の扉を閉め、戸棚へと向かう。戸棚の中を確認し、下の引き出しも次々と確認し、調理道具と食器の配置を覚えて

いく。

「調理場を預かるものはまず調理場の全てを把握しろ。調理場全てが自分の手足のようになって初めていい料理ができる」

それがリックの師でもあった父の教えだった。例え一度しか立たない調理場でも、リックは尊敬する父の教えを守ってきたのだ。それは今日も例外ではない。

一通り調理場を確認したリックは、一番自分の手に合う包丁と使い込まれたまな板を準備し、顎に手を当て考え込む。

「さて、と……。何をつくろうかな？」

リックのレポートリは少なくない。父に教わった分は少ないが、五年の調理場の仕事はリックに豊富な経験を与えていた。

リックはやがて決心したかのように顔を上げ包丁を構えた。

「とにかく精一杯やるしかないよね！」

その瞳に迷いは無く、調理場は軽やかな包丁の音で満たされていたのだった。

「遅いっ！！」

レナはテーブルに両手をバンとたたきつけた。テーブルにはレナのほかに四人座っているが、いつものことで慣れているのか、動じる様子はない。

「まあまあ、まだ三十分しか経っておりませんよ？」

テーブルについているクルーの一人、ロベルトのレナをなだめるように柔らかな言葉。他のクルーもロベルトの言葉に頷く。レナは八つ当たりするかのようにもう一度テーブルに拳を落とした。

「フェイ姉さんはこんなに遅くなかったわ！！」

「フェイより遅いのは当たり前だろ。フェイは十年以上も調理場で仕事してたんだ。それにな、調理場に入ったばかりの頃のあいつの料理は酷かったもんだ。それを口に入れたとたんにつぶ倒れるやつが続出したんだぜ？」

テーブルの一番端に座っている青年は、笑いをこらえながら懐かしそうに目を細めた。レナは青年をキツと睨む。

「うるさいわよ！貴方は黙ってなさい、レイニルド！！」

「分かりましたよ。あゝ、怖い怖い」

青年、レイニルドは冗談めかしたような台詞をこぼして肩をすくめた。レナは俯き、肩をわなわなと震わせる。レイニルド以外の乗組員達は、

「またか」

といった風のため息をつき、両耳を手でふさいだ。同時にレナが椅子を吹き飛ばして猛然と立ち上がり、

「レイニルドっ！ 今日という今日こそ決着を着けてやるんだから！！」

「へえ……。お前、俺に勝てると、本当に思ってたのか？」

レイニルドは椅子に腰を落ち着けたまま、不敵に笑う。レナも同じように不敵な笑みを返した。

「そうね。稽古を怠ってる、お怠けさんに負ける気はしないわ」

剣呑な雰囲気相場を支配し、レイニルドとレナはお互いに隙を伺って動かない。クルー達は半ば楽しんでいるようで、ことの成り行きを黙って見守っていた。

じわりと時が流れていく。レナもレイニルドも互いに動けぬまま。永遠に続くかと思われた睨み合いに終止符を打ったのは、ドアの開く音だった。

「あの……。お料理ができました、けど……」

消え入りそうな小さな、しかし場を収めるには十分なきっかけとなるリックの声。

タイミングをはずされたレナは荒々しく舌打ちをついて椅子にどっかりと腰を下ろした。

「早くもって来なさい！」

「は、はいいい！！」

レナの剣幕にリックはびくりと背筋を伸ばして、あたふたと調理場

の方へ引っ込んでいった。レイニルドは腕を組んでにやにやと、馬鹿にするような笑み。

「子供に八つ当たりするようじゃ、おまえもやっぱりガキだな」

「……………」

レナはぎりぎりと歯を食いしばる。凶星だけに言い返すことができない。レイニルドは勝ち誇ったように小さく笑っていた。

「まったく、この方達はいつになったら大人になるのでしょうか……」

……」

ロベルトの小さな、本当に小さな呟きにレイニルドとレナ以外のクルーはしみじみと頷いたのだった。

第二話 ジュリエッタ号（後書き）

ようやく二話目を投稿することができました。でも、話は全然進んでないですね……。リックの料理も次回に持ち越しですし。投稿間隔は広いですし……。ま、まあ、気長に付き合ってやってください。

第三話 リックの腕前

レナ達ジュリエッタ号の面々の前に出された料理は、彼女らが一度として見たことがない料理だった。一つ一つの皿にそれぞれ少なく上品に盛られ、見た目にも気が配られているらしく、手をつけるのがもったいなく感じるほど。それに、何よりレナを困惑させたのは三本ずつ用意されたスプーンと一本のナイフだった。

レナは料理を顎でさして問う。

「ロベルト。貴方、これがなんだか分かる？」

「ええ。話に聞いただけです、これはフレンチという種類の料理でしょうな。しかし地球時間にして1000年は経った今でも残っているとは、驚きです」

「何なの？ そのふれんちってのは？」

「私も話に聞いただけです、地球のフランスという国の宮廷料理らしいです。地球を出るときに誰もがそのレシピと技術を持ち出したのですが、材料の栽培と入手が困難なため、失われた料理だと聞いています……」

ロベルトは感慨深げに料理を眺めてはしきりに頷いている。レナはロベルトの調子にチツ、と舌打ちをして所在無さげに立っていたリックに抗議の視線を送る。リックははじめ、何のことかわからず首をひねったが、何かに気がついたように手を打った。

「えっと、皆さんの手元にあるナイフとフォークは好きなものを使って構いません。本当はそれぞれの皿で使うフォークやスプーンが違いますが、絶対にそうしないといけないわけではないので……」リックの言葉を聴いて、テーブルに着いた面々はようやく思い思いのフォークやスプーンを取る。そして、恐る恐る料理を掬って口に運んだ。

「あ、あの……。いかが、でしょうか？」

誰からも返事はない。全員停止しているのだ。リックはそんなに自

分が作る料理が不味かったのかと恐怖し始める。

と、レナがもう一口料理を口に運び、阿鼻叫喚の地獄が始まった。テーブルに着く誰もが我先にと、競うように料理を口の中にかっ込みだしたのだ。

「がちゃがちゃ。がちゃがちゃ。」

フォークやスプーンが皿と激突する音による合奏。時折、勢いあまったフォークが皿を粉碎し料理をぶちまける。

「ちよっ、オイ！ それ俺の！」

「早いもの勝ち！」

「てめっ！ 返せ！！」

「いてえ！ 誰じゃわしの手え刺した馬鹿もんは！！」

「ぐおっ！ 皿食っちまった……………」

「あー！ あたしの肉！！」

「早いもん勝ちだっ！」

罵詈雑言の応酬にリックはただただ圧倒されて、呆然と見ているしかなかった。ただ一人、料理の争奪戦に参加していなかったロベルトはボンとリックの肩に手を置く。

「良かったですな、リック君。貴方の料理は皆に受け入れられたようです」

「え、えつと、これが、ですか？」

リックはテーブルの方を指し示す。そこでは既に料理の争奪戦から殴り合いに移行していた。ロベルトはにっこりと笑う。

「ええ。私はこんな活気のある食卓は今まで見たことはありませんよ」

「じゃあ……………」

「いえ、それはまだ何ともいえません。全ては船長、レナ様次第ですから」

リックはがつくりと肩を落とす。

「そうですか……………」

リックは戦場の方へと目を向ける。そこでは大の男に混じったレナ

が、拳を振りかざし大立ち回りを演じていた。

闘争はようやく終結し、集まった全員が静かにテーブルについている。ロベルト以外は申し訳なさそうにうつむき加減になっている。テーブルの上に形を残している皿は既に無かった。

「さて、どうですか皆さん。彼を我らが船の料理長に迎えたいと思うのですが異論がある者はいますか？」

「いいんじゃないか？　むしろこっちからお願いしたいな」

「わしは歓迎じゃ」

「……拒む理由は、無い」

「……」

レナとロベルト以外の三人が口々に歓迎の意を示す。が、レナからは沈黙しかなかった。ロベルトはレナに問いかける。

「レナ様？　貴女はどう考えておりますか？」

「……あたしは反対よ」

レナは搾り出すように言った。テーブルを囲む面々から抗議の聲が上がる。リックは声も上げず項垂れた。ロベルトは静かに問うた。

「どうしてですか？　彼の料理の腕に疑いは無いでしょう？」

「船に乗るってことはここでの生活を捨てるってことよ。憧れだけじゃ乗せられないわ」

静かな調子で言うレナに、一同は黙り込んだ。

「リック。あんたにも家族とか親友とかいるでしょ？　軽い気持ちで船に乗るとか言っちゃ……」

「僕には家族も親友もいないんです！　僕はこの星での生活なんて捨て去りたい！　隣の星までも構いません。どうか、どうか乗せてください！！」

リックはそう叫んで頭を下げる。彼が必死であることは誰の目にも明白だった。非難の目がレナに集まり、レナは居心地悪そうに咳払いをし、

「あーもー、あたしが悪者みたいじゃない」

頭をがりがりかいて湾刀を抜いて振りかざした。

「総員配置に戻れ！ 補給が済み次第この星を出る！」

『了解！』

食堂に集まっていた船員達は冗談めかした掛け声をかけて食堂を後にした。残されたのはレナとリックだけ。リックは恐る恐るレナに声を掛ける。

「あの、僕は……」

「あんたは食堂の掃除が済み次第、デツキに来なさい」

「えっ、それじゃあ！」

リックは不安そうな顔から一転、ぱあっと笑顔になった。レナは気恥ずかしくなったのかくると背を向ける。

「あたしをレナって呼んで。それが条件よ」

「う、うん！ ありがとう、レナ！」

レナはリックの感謝の言葉を背で受けて、手をひらひら振りながら廊下の向こうへと消えていった。リックは震える手をぐっと握って、この幸福をかみ締めたのだった。

第三話 リックの腕前（後書き）

初めての方は初めまして。そうでない方はお久しぶりです。274日振りの更新……。丸9カ月更新してなかったみたいですね。吃驚です。ああ吃驚。

久しぶりに今まで投稿した分を見て、愕然としました。ストーリーを全く忘れていたのです！でも読み進めるうちにあの頃の記憶が戻ってきました。大筋しか決まっていなくて次の話に困ってるってことも…………。

兎に角！これから心を入れ換えて頑張りそうなので、応援よろしく願います！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2121b/>

無限のそら

2010年10月11日22時58分発行